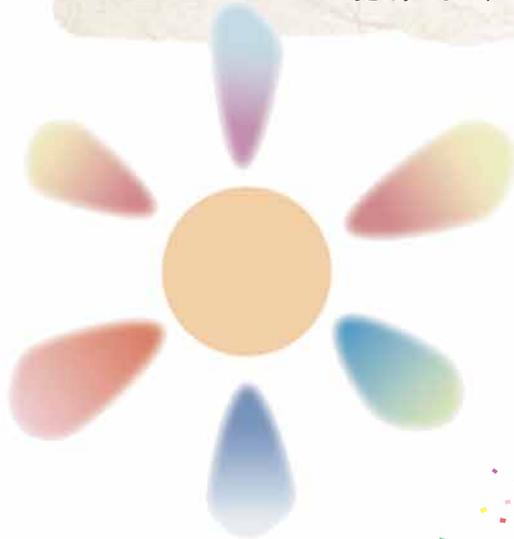


健康教育®

— 健康なくして教育はありえない —

- ◎ 子育て心理学から見た「子どもの力を引き出す育児」… 佐藤 めぐみ
- ◎ 子供たちが、『AIに負けない人材』となるために …………… 森 大輔



「健康教育」[®]

——健康なくして教育はありえない——

1911年、河合グループ創業者である薬学博士・河合亀太郎がかかげた企業理念です。



薬学博士・河合亀太郎

こどもたちのすこやかな成長を願い、より一層お役に立てる情報のご提供・ご提案を目指し、発刊致しております。これからも、創業者・河合亀太郎の理念「健康教育」を大切に伝え続けてまいります。今後ともご愛読のほどよろしくお願い致します。

目 次

3	子育て心理学から見た「子どもの力を引き出す育児」
9	子供たちが、『Allに負けない人材』となるために
15	あらまし

子育て心理学から見た 「子どもの力を引き出す育児」

子育て心理の専門家
ポジティブ育児研究所 代表

佐藤 めぐみ



子どもたちは、自分の中から湧き出るドキドキやワクワクを追求しながら、自然に自分が持つ力を発揮していきます。一方、親や教師など、大人の関わりによって、その子の力が“引き出される”こともよくあります。では、何がそのきっかけになるのでしょうか？ここでは、「子どもの力を引き出すために、親ができること」について、子育て心理学の視点からお伝えしていきます。



親の関わりで 子どもは変わる

私が行っている育児相談には、様々なお悩みが寄せられます。「すぐに泣く」「ママから離れられない」「やる気にならない」「言うことを聞かない」など。

これらのお悩みを心理学的に分析することで、その子にそのとき必要なアプローチが見えてくるわけですが、それを実践していただくことで、子どもたちが大きく変わっていく様

子を目の当たりにします。そうです、子どもは親がどう関わるかで、ものすごく変わるのです。

今回のテーマ「子どもの力」も同様です。親がどう関わっていくかで、子どもの力を引き出すこともできるし、逆につぶしてしまうこともあります。親の関わりは、子どもの心に直接響き、それがプラスに働けば、その子は力を出せますし、マイナスに働いてしまうと、すねたり、へそを曲

げたりしてしまうわけです。

つまり、子どもの力を引き出すコツは、いかに子どもの心にいい響きを伝えられるかということ。そこで今回は、私がこれまでのカウンセリング経験で得た「結局、何が子どもの心に響くのか?」を順にご紹介していきたいと思います。

親の言葉で 子どもは変わる

まず1つめが、親の言葉です。どんな言葉をかけるかで、子どもの行動は大きく変わります。言葉次第で、その子のモチベーションが上がることもあれば、下がることもあるのです。

いくつか事例をご紹介します。

◇力を引き出せない、やる気を失わせる関わり

「ピーマン、ほとんど残ってるじゃない」「まだ靴下履いていないじゃない。もうさっさとして」「ダメダメ、そうじゃないでしょ。このままだったら、発表会出られないよ」



◇力を引き出す、やる気をアップさせる関わり

「お、ピーマン、ちょっと食べれたね。頑張ってるー!」「あと靴下で完成だね。ママ負けちゃいそう」「この部分、頑張ったからすごく上手になったね。よし、あと3回集中してやってみよう!」



それぞれの特徴をまとめると、

①やる気ダウン=できていないところを注意する

②やる気アップ=まずできているところからほめる

となります。

「ほめる=おだてる」 ではない

子どものできていないところが目につく、だからまず突っつきたくなる……、よくあります。それは、親が我が子に、「こうあって欲しい」と期待をかけている裏返しでもあるでしょう。ただそのとき、子どもに100%を求め、そこに基準を置くと、80%でも「まだまだ」に思えてしまいます。

裸ん坊、身一つで生まれてきた子どもたちにとっては、お着替えだって、歯磨きだって、お片づけだって、未知の世界です。何も知らないところから1つずつ学んでいきます。親は、子どもの行動をゼロから育むつもりで、視線をググッと下げると、たくさんのほめポイントが見えてきます。「40%できているところ」「昨日よりちょっとましになったところ」を、「頑張っているよ」「ママ嬉しいな」とほめていくことで、「よしやるぞ」という力が引き出され、それが積み重なって、やがて100%へと導けるのです。

「でも、たいしてできてもないのに、ほめたら図に乗りそうで」と心配する親御さんがいます。たしかに、「〇〇ちゃんは天才!」のように、もしその子の能力や出来高ばかりに目を向けたほめ方を続けていたら、子どものやる気は、逆に下がります。なぜなら、「ぼくは天才だ。だからやらなくなったらできるんだ」と解釈し、あぐらをかくようになるからです。

ここで言う、子どもの力を引き出すほめ方は、これとはニュアンスが違います。子どもの能力や才能ではなく、その子の努力や我慢な

どの「ちょっと頑張っている気持ち」を肯定していくことで、気持ちを前に向け、行動をプラス方向へ持っていく原動力にするのです。

3歳児神話ならぬ、 8歳児神話、知っていますか？

ここまでご紹介してきたのは、親が質のいい言葉を発することで、その場で子どもに変化をもたらす、言うなれば、「直接型」の影響力についてです。これについては、すでにご存知の方も多いと思いますし、実際に日々の親子のコミュニケーションで感じていると思います。ただ、親の言葉の影響というのは、このような直接型だけではありません。あまり知られていないかもしれませんが、親の言葉は、子どもの思考スタイルにも大きな影響を及ぼします。

When? ~ いつ

思考スタイルとは、「あの人はプラス思考だ」「ネガティブな人だなあ」というようなその人の物の捉え方のことです。急速に発達するのは、0~8歳くらいまでの間と言われています。この時期に、親が積極的にポジティブな言葉を使うと、その発言の土台にある前向きな発想や考え方までも一緒に吸収していくため、子どもの発想もポジティブになる傾向があります。そして、その時期を過ぎると、その子の思考スタイルとして定着し、特別な働きかけをしなくても、そのテンプレートを使って、世の中を見るようになります。ですので、幼少期の親子のコミュニケーションは、量だけでなく、質にもこだわることがポイントになってきます。昔から、3歳までの育児は大事と言われていますが、それ以降の数年も非常に影響力があります。3歳児神話ならぬ、8歳児神話と言えます。

Who? ~ だれから

子どもと一番長く接し、コミュニケーションの量が多い人ほど、影響を及ぼす力も強くなりますので、一般的には、お母さんがそのキーパーソンになっているご家庭が多いでしょう。実際に、母子の思考スタイルは、子どもの性別に関わらず、似通っていることも分かっています。男の子でも、お母さんに似る傾向が高いのです。

How? ~ どのようにして

思考スタイルの材料は、日々のコミュニケーションです。しかし、コミュニケーションと言っても、きちんと向かい合って話す会話だけではありません。その子が耳にする言葉、目にする表情などが、その材料となって取り込まれていきます。つまり、お母さんがお子さんに発する声かけだけでなく、お母さんの独り言、ママ友との会話など、「対・子ども」ではない言葉も参考にし、物事の見方をパターン化していきます。



この間接型の親の言葉の影響力は、はじめにお伝えした直接型と違い、その場では把握しづらいので見過ごされがちですが、その子が大人になってからもつきあっていく思考スタイルを作っていることを考えたら、おろそかにはできません。ポジティブな発想でいる方が、物事にも前向きに取り組めますので、持っている力を発揮しやすいからです。

前出のピーマンの例でも分かるように、コップ半分の水を、「半分も入っている」と取るか、「半分しか入っていない」と取るかでは、子どもに伝わるニュアンスは大きく変わります。自分が言われる側だったら、どちらが心地よく響くかを意識して発言すると、いい声かけが選択できると思います。

言葉はカギ、でも実はもっと大事なものがある

ここまで、子どもの力を引き出す親の言葉について見てきましたが、大事なものは言葉だけではありません。親の行動、態度、姿勢も、子どもの力を引き出す上では、非常に大きな存在です。

その影響力は、お子さんの年齢が小さければ小さいほど、大きくなります。なぜなら、まだ言葉を知らない赤ちゃん期ほど、「ママが何を言っているか」を、「ママが何をしているか」で判断しようとするからです。とくに0～2歳くらいは、相手の言葉を聞いて学ぶよりも、相手の行動を見て学ぶというラーニングスタイルが優勢になります。その点を踏まえ、ここからは、言葉にプラスして意識していきたい、親の行動力についてご紹介していきます。

言葉だけでは不十分、行動との一貫性がポイント

カウンセリングで受ける相談でよくあるのが、「ちゃんと言っているのにちっとも○○しない」というケースです。しかし、実際にお話を詳しく聞くと、親の言動と行動が矛盾していることが非常によくあります。とくに多く見られる2つのパターンを見ていきましょう。

◇パターン1:有言不実行型

たとえば、

- 子どもには「片づけなさい」と言いつつ、お父さんは靴下を脱ぎっぱなし
- 子どもには「ケンカはだめだよ」と言いつつ、夫婦喧嘩ばかり

のように、子どもに言ったことを、自分が守れていないパターンです。小さい子ほど、言葉で理解しようとするよりも、お父さんやお母さんのリアクションで学習していることが多いので、自分の言葉と行動に一貫性を持たせることはとても大事になってきます。

◇パターン2:非現実けん制型

もう1つよく見られるのが、

- 「甘いものは禁止!」と言ったのに、「今回だけだよ」とあげてしまったり
- 「ゲームは没収!」と言ったのに、泣かれて、結局渡してしまったり

のようなパターンです。子どもが言うことを聞かないときに、「びっくりするようなことを言えば、言うことを聞かざる」という心理が、親の方に働くと、このような言葉が出がちです。

しかし、

- 「もうずっとあげないからね」
- 「絶対に連れていかないからね」
- 「全部捨てちゃうよ」

のような、言ったものの守れそうにない非現実的な言葉は、結局は、泣き落としにあって、親が折れるというパターンに陥ることが多く、逆に子どもに変なことを学ばせてしまいます。それは、「ママが言っていることは本当ではない」「泣けばなんとかなる」と。このようなパターンに陥らないようにするには、親が守れることを言うに限ります。

「おやつは今日はなしだよ」

「ゲームは今日の夕方はママが預かるからね」

「床に散らかっているおもちゃは、今日は”預かり箱”だよ」

のような感じです。大げさなことを言うよりも、小さく言って、しっかり守る方が、子どもには響きやすいのです。

大人は、言葉でのコミュニケーションに長けているため、子どもに対しても、いつのまにか、「言えば何とかかなるはず」と言葉の力を強く信じてしまう傾向があります。よって、もし1回言っても効果がないと、繰り返し何度も言ったり、声を強めて怒鳴ったりと、なおも言



葉だけで解決しようとしてしまうのです。しかし、「言いつ放し」では、子どもには通用しません。言った以上は、自分もそれを行動で示す一貫性があって、子どもも納得して動くようになります。

訊くのではなく、聴く

ここまで、「子どもの力をいかに引き出すか」について、「言葉の質は大事だよ」「言葉と行動が一貫していることもポイントだよ」ということをお伝えしてきましたが、最後に、少し逆行する形になりますが、「言葉を引っ込める大事さ」についてもお話させてください。

今では、親の声かけが子どもに影響を及ぼすことは広く知られているので、ネット上の育児情報や本屋に並ぶ育児本でも、「声かけ」をテーマにしたものをよく見かけます。たとえば、「子どもを〇〇にする声かけ」「絶対にやめるべきNGワード」のような特集です。実際私も、それらのテーマでの執筆を依頼されることがよくありますが、最近、「声かけ」が少し前面に出過ぎているのではと感じることもあります。言葉を選んで声かけさえマスターすれば、育児はうまくいくような誤解を与えかねないかとちょっと心配しています。

声をかけることばかりに気持ちが行ってしまって、子どもの心の声を聴けていないのでは、元も子もありません。育児において、子どもの話を聴くことは何にも勝るからです。それにもかかわらず、親がやっているのは、「訊く(きく)」だったりします。保育園や幼稚園から戻ってくるなり、「どうだった?」「それでどうしたの?」と質問攻め。子どもの話を聴くはずが、一番しゃべっているのはお母さんだったというのはよくある話です。

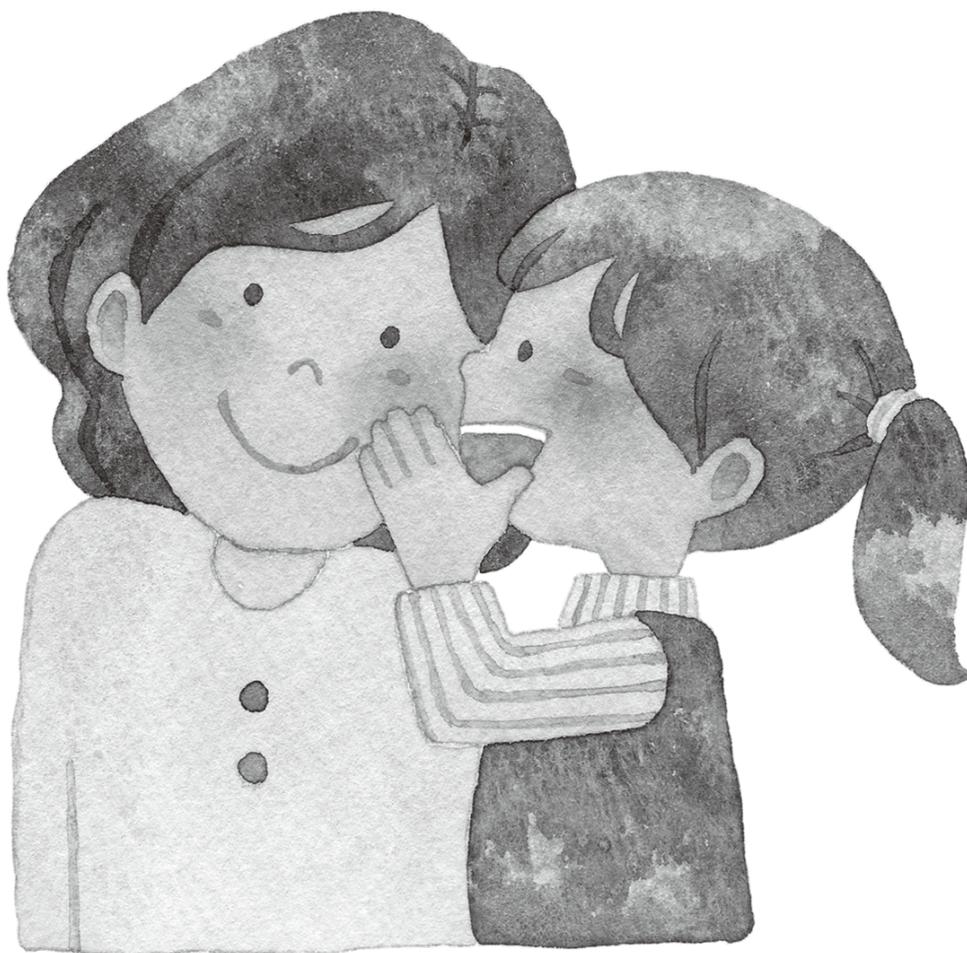
子どもは、「パパ聞いて!」「ママ聞いて!」という気持ちでいっぱいです。そして、自分の話

を真剣に聴いてくれる人が大好きです。育児本で覚えた声かけをマスターするよりも、まず取り入れていただきたいのは、純粹に子どもの話を聴く習慣です。傾聴で、子どもはがらりと変わります。子どもを膝の上に抱っこして、しっかりお話を聴くというような、とてもシンプルな積み重ねが、子どもの心を大きく動かすのです。なぜなら、自分の話に真剣に耳を傾けてもらうことで、「ボクは大事にされている」「ワタシは愛されている」を実感し、自分を肯定してもらっている、ほんわかした気持ちに浸れるからです。

今の時代、子どもの自己肯定感が低くなっていることが懸念されています。言葉で子どもの存在を肯定してあげることができません

が、聴くことで、子どもの存在を丸ごと受け入れてあげることがもできるのです。自分を肯定できている子は、ちょっとしたことではめげず、自分の力を信じて試すことができます。親が子どもの話をしっかり「聴く」ことで、子どもの力を引き出すこともできるのです。

最後になりますが、子どもの心は本当に正直です。ポジティブな声かけをすれば、ポジティブ発想を吸収し、親が言葉と行動を一貫させると、その子も動くようになります。そして、親が子どもの話をしっかり聴いてあげると、子どもも親の言うことを聞くようになりますのです。打てば響くのが子どもの心、ならば打たない手はありません。



子供たちが、『AIに負けない人材』 となるために

森大塾 代表
All About「子供の教育」ガイド

森 大輔

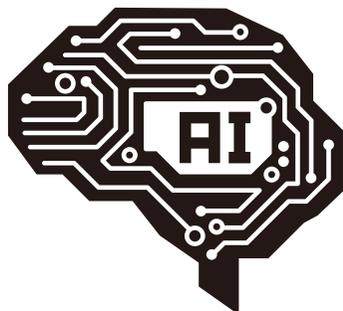


「AIの進歩により、今後10～20年程度で、人間が行う仕事の約半分が機械に奪われる」と言われています。そんな現代において、子供たちが将来社会で活躍していくためには、どのような力を育てていけばよいのでしょうか。

AI が人に代わる時代

作業的な仕事はもとより、証券アナリストやファンドマネージャーのような高度な分析能力が求められる仕事や作家・作曲家のような創造力が求められる仕事においても、AIが人に代わる時代が到来しています。

そんな時代においては、AIに負けない人間になるために、「思考力」と「コミュニケーション能力」を育てていく必要があると私は考えます。



「思考力」で AI に負けない

そもそも「思考力」とは具体的にどのような力なのでしょうか。私は、以下の3つの力が、子供たちが伸ばすべき「思考力」だと考えています。

- ① 比較
- ② 抽象化
- ③ 因果関係

「比較」能力とは？

「比較」能力とは、物事の「相違点」「共通点」を見つけることです。この「比較」能力が思考力のベースであると言っても過言ではありません。例えば、夕食の買い物をするときでも、「AスーパーよりもBスーパーの方が安い(相違点)」「AスーパーもBスーパーも20時過ぎると総菜が安くなる(共通点)」と言ったように、「比較」をしていますよね？

子供も、子供なりに「比較」はしていますが、「観点のずれ」が起きていることがあります。例えば、先日、私の経営する塾に通っている子

供たちに「クリスマスとお正月どちらが好きか?」というテーマで作文を書いてもらいました。すると、

・「クリスマスは、プレゼントがもらえるけれど、お正月はおせち料理がおいしくないから、クリスマスが好き」
(「もらえるもの」と「食べ物」の2つの観点が混在)

・「お正月は、遠くに住んでいる親戚に会えるが、クリスマスは学校があるから、お正月が好き」
(「会う人」と「休みか否か」という2つの観点が混在)

といったように、バラバラの観点で考えてしまっている生徒が多く見受けられました。

本来であれば、1つの観点で、比較しなければ正しい比較とは言えません。

誰かに何かを説明したり説得したりするときなど、「比較」を使う場面は多くあります。いくつかの観点が混ざってしまったり、そもそも観点がずれたりしていると、相手に伝わりにくくなりますので、注意しましょう。

「比較」能力を身に付けるには?

「比較」能力を身に付けるには、まずは、周りのものをいろいろな観点で比べる練習をしましょう。例えば、「リンゴとミカンは何が同じで何が違う?」など身近なものから練習してみま



しょう。「色」「大きさ」「におい」「旬の時期」など、様々な観点が考えられます。また小学校受験でも「比較」はよく登場する単元ですので、小学校受験をしなくとも、受験対策の教材を使って集中的に学習するのも良いでしょう。

抽象化とは?

物事を抽象化(具体化)する能力は、どのような仕事についても伸ばすべき能力です。

抽象 ↔ 具体

哺乳類	犬・猫・イルカ
果物	イチゴ・バナナ・メロン

この抽象化能力は、自然と身についてくるものではありません。

例えば、子供に、自宅にテーブルを指さして「これは、テーブルって言うんだよ」と教えたします。すると、子供は、自宅にあるテーブルだけでなく、大きさや色や形が異なる他の家やレストランにあるテーブルでも、自然と「テーブル」と言えるようになります。

これは、子供なりに、「テーブル」→「天板があって、足が4本あるもの」と抽象化できていることの表れと言えるでしょう。

このように「抽象化」する能力は、自然と身についていく能力ではありますが、人によって差が出てくるのも事実です。

この能力に優れている人は、ある事実を抽象化し、他の場面でも応用することが出来ます。

例えば

「うちの息子は、テレビゲームは何時間でもやり続けられるし、ゲームに関する知識も豊富だ。」

という事実に対して、

「子供は、楽しいことに対しては集中できるし、そのことに関しては記憶力も高まる。」

と抽象化できます。

そして、
「勉強にゲームの要素を取り入れれば、集中するし、覚えも良くなるだろう。だから遊びながら学べる教材を探してみよう。」
などと、他の場面でも応用することが出来ます。



一方で、「抽象化」能力が低い人は、
「うちの息子は、ゲームばかりして、勉強しないんだよねー。」
と愚痴をこぼすくらいで、他の場面で応用することが出来ません。

「抽象化」能力を身に付けるためには？

「抽象化」能力を身に付けるためには、まず周りのものを具体と抽象に分けて整理する練習をしていきましょう。以下のように図式化して整理すると分かりやすいと思います。(図1)

このように、抽象と具体を整理する練習に意識的に取り組むことも大切です。幼児期の子供がやるのであれば、具体物やイラストを使ってやっても良いと思います。

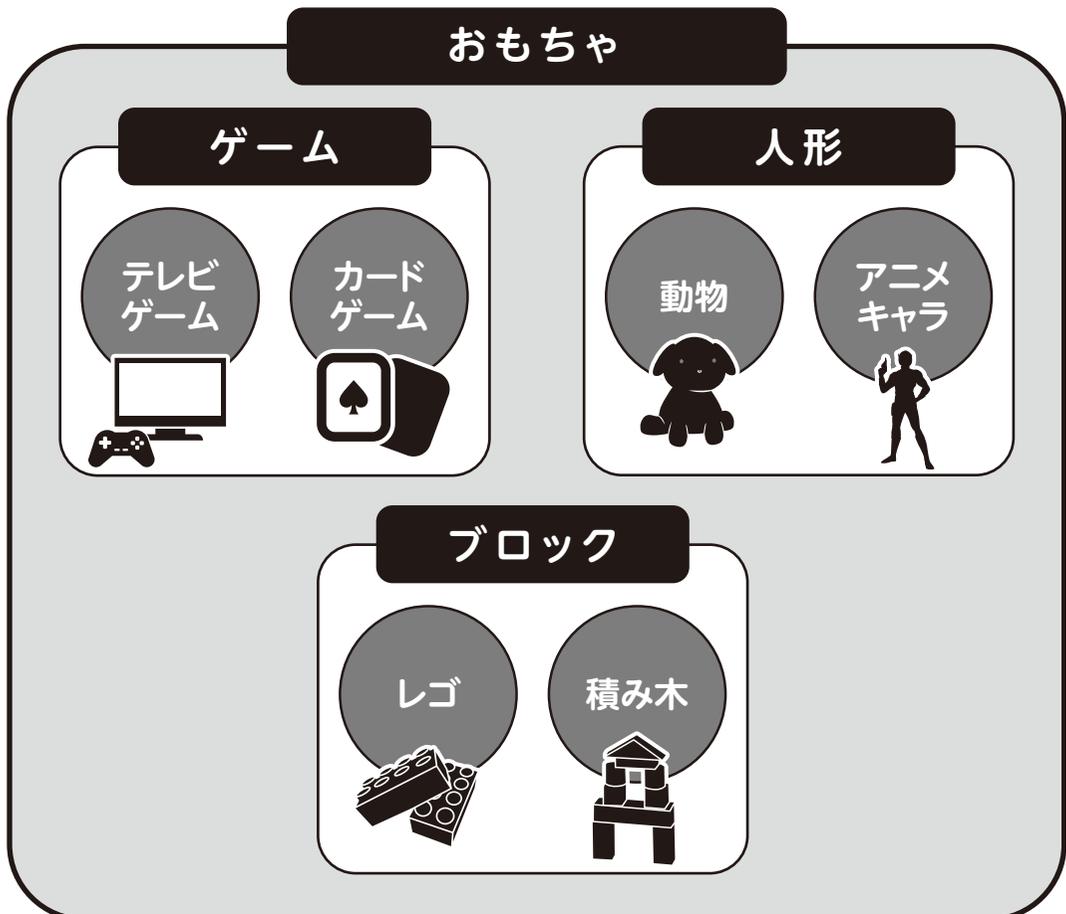


図1.具体と抽象図式化

因果関係とは？

「因果関係」は、原因と結果の関係です。

私の経営する塾に通う生徒たちにも、「因果関係」を強く意識させています。例えば、算数の問題で間違えた時、講師が間違えた部分を指摘するのではなく、まずは子供たち自身で「間違えた理由」を探させています。このように、「因果関係」を明確にさせてなければ、同じ間違いを繰り返してしまいます。

これは、大人の世界でも同じです。「やる気はあるし、頑張っているようにみえるのに、結果が出ない人」は、「因果関係」をあまり意識出来ていないように思えます。「なぜ自分は結果が出ないのか」「なぜ結果が出ている人は、結果が出せるのか」など深く考えずに、ただ、がむしゃらに頑張っているだけでは、なかなか結果は出せないでしょう。

ちなみに、AIは、大量のデータから人間では気づかないような「相関関係」を発見することが出来ますが、そこに「因果関係」があるかどうかまでは今のところ判断が出来ないそうです。つまり、「因果関係」があるか否かという判断は、我々人間がすべきことになりますので、子供たちの「因果関係」を把握する力も、しっかり育てていきたいですね。

「因果関係」を把握する力を育てるには？

「因果関係」を把握する力を育てるには、まずその習慣をつけること。ただ、実は子供にはそのベースが出来ているので、周囲の大人が、そこを伸ばしてあげることが大事です。

子供はある時期を迎えると、「なぜ？」「どうして？」とやたらと質問をするようになります。いわゆるこの「質問期」に(かなり大変だとは思いますが)大人がその質問に丁寧に対応することが大切です。大人でも分からないようなことは、一緒に調べてあげましょう。調べ方が分かれば、そのうち一人で調べるようにな

ります。

余談になりますが、偉大な発明家であるトーマス・エジソンは、「なぜ？」「どうして？」と質問が多く周りの大人たちを困らせていたそうです。挙句の果てには、小学校の先生から「もう学校に来なくてよい」と言われ、実際に学校に行かなくなりました。そこで、エジソンのお母さんが自宅で勉強を教えることになったのですが、エジソンのお母さんは、息子の「なぜ？」「どうして？」にとことん付き合いました。この時期に「因果関係」を把握する力が育ったことも、エジソンが偉大な発明家となった一つの要素だったのでしょう。

「コミュニケーション能力」でAIに負けない

AIの進歩によって、個々人の情報量や知識量に関する差はなくなっていきます。そうになると、一人一人の「コミュニケーション能力」が今まで以上に重要視される世の中になってくると思います。どんな仕事に就いたとしても、自分の「ファン」を作っていくことが求められてきます。今回はそのために、重要となる能力のうち、2つの力「目配り・気配り・心配り」「笑顔」についてお話したいと思います。



「目配り・気配り・心配り」

「目配り・気配り・心配り」は、是非、子供の時から身に付けていきたい力です。大人になってこの力をつけようとしても中々出来るものではありません。

自分のことだけでなく、周囲の細かいところまで注意を向けて、周囲の人の心や体の状況を推し量ること(目配り)。そして相手の立場に立って考え、相手が求めていることに先回りして対応すること(気配り)。そして、時には相手が感動するような相手の期待を越える対応ができること(心配り)。このような能力が身についている人は、必ず「ファン」がつくことでしょう。

私の体験談になりますが、とある鉄板焼のお店での出来事をご紹介します。その店に、妻と1年ぶり2回目に訪れた時のこと。店に入り名前を告げると、席に案内されたのですが、その時、店員の方が「旦那様はこちらのお席で、奥様はこちらのお席でいかがでしょうか？」とわざわざ席の指定までしてきました。その時は、違和感があったものの、特に気に留めなかったのですが、1品目を食べる時その理由に気が付きました。なんと、私の箸の向きだけ、左利きが使いやすい向きに置かれていたのです。私は左利きなのですが、もちろん特にそのことについてお店に伝えていませんし、1年前にその話を店員さんにした覚えもありません。感動して店員さんに聞いてみると(左利きは、普段右利き社会でストレスを感じているので、こんな対応されたら感動するのです)、1年前私が左手で箸を持っていることに気が付き、メモしておいたとのこと。私は、この店員さんの「ファン」に一瞬でなっしまい、それ以来お祝い事はそのお店でするようになりました。

このように「目配り・気配り・心配り」が出来る人が、多くの「ファン」を作り、社会で活躍できる人材となっていくのだと思います。

子供が「目配り・気配り・心配り」が出来る人材になるためには？

このような人材になるよう子供を育てるためには、どうしたらよいのでしょうか。

最も大切なことは、親自身が「目配り・気配り・心配り」のお手本をみせることです。どんなことでもそうですが、子供は親のマネをします。親が「目配り・気配り・心配り」をしている姿を見せることで子供は、自然とその力を身に付けていきます。

また、子供と一緒にトレーニングをすることも出来ます。例えば、(行儀は少々悪いです)レストランの様な人が集まる場所にいったとき、周囲にいるお客さんを観察して、その人が何を求めているのかを想像したり、自分がサービスを提供する側だったら、その人に対してどうするかを考えてみたりするのも良い練習になると思います。

「笑顔」

人は、視覚的な情報に大きく左右されます。「話の内容などの言語情報よりも、話し手の表情やしぐさなどの視覚的な情報の方が人に影響を与える」という研究結果も出ているほどです。

だからこそ、私たちは、自分自身の顔の表情にまで気を配るべきです。

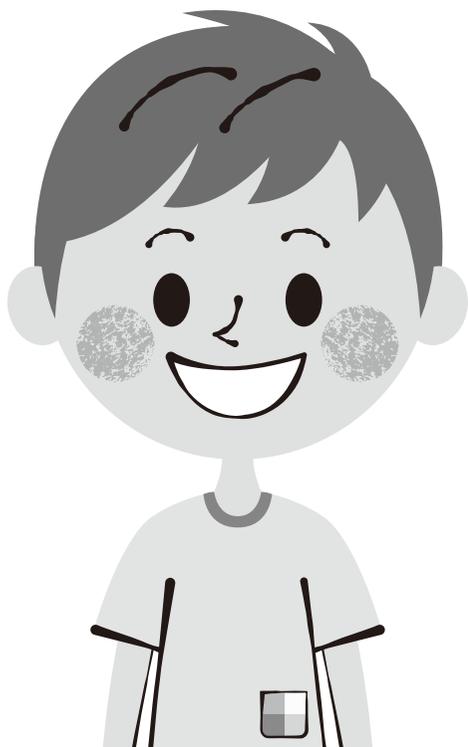
私は、塾の子供たちに「自分の表情に責任を持ちなさい」と常日頃言っています。口では「ありがとう」と言っている、そこに笑顔がなければ、感謝の心は伝わりません。どんなに料理がおいしくても、サーブしてくれる人の顔が笑顔でなければ、おいしさも半減してしまいます。

特に、「話を聞くとき」は要注意です。子供たちは、話し手が話しやすいような表情・態度で話が聞けているでしょうか？

「笑顔」になるためには？

これも、先ほどと同様「親が見本になる」ことが大切です。普段から「笑顔」で接することをまず大人が意識しましょう。レジでお会計をする時、レストランで注文をする時など、みなさんは、どのような表情でお店の人と接していますか？たとえ、お金を払ってサービスを受ける側であっても、「笑顔」は大切にもらいたいと思います。

また、鏡の前で笑顔を作る練習も有効です。私自身、学生時代は、どちらかという时无表情で冷たい印象を与えていたようで（自分はその気は無かったのですが）、それを就職活動時に指摘されて以降、鏡の前で笑顔を作る練習をしたり、普段から口角を上げるよう意識したりするようになりました。今では「（表情も、体型も）丸くなったね!」と学生時代からの友人らに言われるようになりました。



将来から逆算して、 今何をすべきか考えよう。

今回は、「子供たちが、『AIに負けない人材』となるために」というテーマでお話させていただきました。

今の世の中、多様な情報があふれ、また変化のスピードも速く、「教育」の分野においても「子供にとって何をするのが良いのか」分かりにくい状況だと思えます。そんな中でも、保護者のみなさんや先生方には、目の前の結果にだけこだわったり、流行にただ流されたりするのではなく、「子供たちの将来から逆算して今何をすべきか」という視点から子供の教育について考えていただければと思います。

どんなに世の中が変化しても、子供たちが将来夢を叶え、社会で活躍するためには、今回ご紹介した「思考力」「コミュニケーション力」が必要であることには変わりはないはずです。是非、この機会に子供たちの「思考力」「コミュニケーション力」を育てるためには、具体的に何ができるのかを考えていただければと思います。



■執筆者紹介

佐藤 めぐみ 子育て心理学から見た「子どもの力を引き出す育児」

子育て心理の専門家

ポジティブ育児研究所 代表 & 育児相談室「ポジカフェ」主宰

イギリス・レスター大学大学院修士号(MSc)取得。オランダ心理学会(NIP)認定心理士。

現在は、ポジティブ育児研究所でのママ向けの子育て心理検定講座(2級、1級)、育児相談室でのカウンセリング、メディアや企業への執筆活動などを通じ、子育て心理学で育児をサポートする活動をしている。著書に「子育て心理学のプロが教える輝くママの習慣」など。

■公式HP：<https://megumi-sato.com/>

■ポジティブ育児研究所：<https://pp-labo.org/>

■森 大輔

子供たちが、『AIに負けない人材』となるために

群馬県出身。慶應義塾高校を経て慶應義塾大学法学部法律学科に進学。

大学卒業後、東証一部上場企業にて新卒採用を担当した後、関西中学受験進学塾NO.1実績を誇る浜学園に入社。算数科に所属しながら新卒採用や営業企画等業務内容は多岐にわたる。

その後、2011年に独立。森大塾をスタート。

幼児から中学生まで、幅広い世代の生徒を指導。従来の塾のイメージとは異なり「学力向上」だけでなく「思考力」や「コミュニケーション力」等、子供たちが将来社会で活躍するために必要となる力を総合的に身に付けられるような講座を開講している。

また、All Aboutの「子供の教育」ガイドとしての執筆活動や、講演活動・テレビ番組のゲストコメンテーターとしても活動している。

■協力園

表紙：学校法人 亀ヶ谷学園 幼稚園型認定こども園 宮前幼稚園（神奈川県 川崎市 宮前区）

■「健康教育」あらし

こどもたちのすこやかな成長を願って創刊された季刊誌「健康教育®」。

1956年の創刊以来、創業者・河合亀太郎の信念を伝え続けております。

読者対象 / 日本全国の小中学校・幼稚園・保育園の学校長や園長を始めとする先生方・保健主事・養護教諭・給食関係者など。

平素より「健康教育®」をご愛読頂きまして、誠にありがとうございます。

編集部では、皆様のお役に立つよりよい紙面づくりを目指しており、皆さまが実践されている健康教育の参考にして頂ければ幸いです。ご覧になりたい内容やテーマ、また各園・学校紹介（例：当園では、健康教育の一貫として、このようなことを行っています等）、そのほかご意見・ご感想がありましたら是非お聞かせください。

なお、お問い合わせは下記の連絡先までお願い致します。

お問い合わせ・ご連絡先

河合薬業株式会社 「健康教育®」編集部

〒164-0001 東京都中野区中野6丁目3番5号

TEL：03-3365-1110（代） FAX：03-3365-1180

E-mail アドレス：genkikko@kawai-kanyu.co.jp

ホームページアドレス：<http://www.kawai-kanyu.co.jp>

「肝油ドロップ」って、なんだろう。



それは「元気っ子ビタミン」。



カルシウム肝油ドロップ

ビタミンA・D・カルシウムが
入っています。



ビタミンC肝油ドロップ

ビタミンA・D・Cが
入っています。

肝油ドロップは「よみきかせ」を応援しています。

高橋みなみの
これから何する? 「よみきかせ」  TOKYO FM [FM80.0MHz (月曜日~木曜日14:30頃~)]